

依存からの回復

米国の試み 下

野球王ベーブ・ルース誕生の地、メリーランド州ポルティモア。美しい港町は、一步裏道に入れば、ひったくりや売春、殺人など犯罪が絶えない。

古い町並みの一角にあるジョンズ・ホプキンス大学女性依存治療センターには、約300人が通う。20代、30代が大半で、性感染症の感染率が7割以上、HIVも3割。治療はまずその対策から始まり、カウンセリングが続けられる。

ラビティア(38)はセンターに通うようになって1年。「コカインと出あったのは18歳の時。家も学校も何もかもうまく行かなくて。そんな時友人に教わったの。嫌なこと全部忘れられるよって。最初は、本当にぞうだったんだけど……」

今は週2回、ミーティングに出る。

「息子が3人いるの。孫ももうすぐ8カ月になる。学校にもう一度行って、看護婦になりたい」

本来の自分取り戻すまで

イネーブラー 依存は、そ耐え続ける父、心配し、あればそれを支える人がいる。これ世話をやく母……。これ1人では続けられない。酒にらの行動すべてが、本人が現よる不始末のしりぬぐいをす 実と直面する機会を失わせ、る妻、ギャンブルの借金を肩 結果的に依存を続けることを代わりする夫、子供の暴力に 可能にしている、とされる。

メアリー・マツコール所長は「体の病気は薬で治る。でも依存は、本人の考え方や行動を変えないといけない。それにはとても時間がかかる」という。

女性は背景に様々な問題を抱えていて、治療も複雑になる。親や夫、恋人の問題、飲酒や暴力、性的虐待などによる心的外傷後ストレス障害(PTSD)、うつ病、パニック障害、摂食障害などを伴っている場合も多い。

「依存は、本人を苦しめるだけでなく家族を巻き込み、傷つける。子どもの人間関係や問題行動に連鎖する」とコネティカット大学のミチエ・ハッセルブロック教授(ソーシャルワーク)はいう。

依存は「否認の病気」だ。家族も問題を隠し、抱え込もうとする。家族は、原因

は自分にあると考え、救えるのは自分だけだと思いつかぬまま、依存を助けるイネーブラー(可能にする人)を演じてしまう」。ミネソタ州ミネアポリス郊外にあるヘーゼルデン財団の治療部門責任者ブルース・ラルソンさんはいう。49年にできたヘーゼルデンは依存治療の草分けで、国内はもとより世界中から酒や薬物、暴力、ギャンブル、摂食障害など様々な問題を抱えた人が来る。

依存の本人と、その世話をしつう家族との関係は、「共依存」とも言われる。「でも、私たちはその言葉をあまり使わない。家族だったら、心配し、とまどつのは当然」と家族センターのローズマリー・ハートマン所長。

大切なのは、本人と家族、それぞれが本来の自分を見つけてることだ。治療で

「少しでもよく」積み重ね

家族

「リカバリー(回復)」を願う患者たちのメッセージが一面に張られた治療所の壁。子どもの名前もあった。コネティカット州ハートフォードの酒薬物回復センターで

は、家族もカウンセリングやグループ・ミーティングを通して、自己を取り戻していく。「家族は原因ではない。でも、家族が一番重要なかぎを握っている」

■ ■
ニューヨークに住むキャシー(39)の元に来週、4カ月ぶりに夫(44)が帰ってくる。

建設会社勤務。仕事熱心だが、飲むと人が変わった。大声を出して、妻や息子をなぐる。キャシーは毎晩、「お酒をやめて」と泣いた。1週間、1カ月やめられたこともある。でも、必ず裏切られた。

そんな生活が4年ほど続いて、夫は入院した。大量の吐血。肝硬変だった。医師から「君も救われる必要がある」といわれ、キャシーは家族の自助グループに通い始めた。そこで友人ができた。パートだが、仕事も見つけた。これまで考えられなかったことが考えられるようになった。自分のしたことが正しいこと、毎日の生活……。

「もう私は泣かない」
夫が治療所から戻る日は息子の9歳の誕生日だ。プレゼントの紙袋を抱え、「私

たち、やり直せるかしら」とほほえんだ。

■ ■
依存からの回復。その定義はともむずかしいとハートマン所長はいう。暴力をやめること、ひきこもりをやめること、過食をやめること……。「みんな期待するわ。でも、そんなに簡単じゃない。以前より少しでもよいと感じられたら、それを積み重ねれば、必ず道はある」

(五十嵐道子)

マッコール所長(中央)を囲む患者たち。
会話も治療の一つだ=メリーランド州ボル
ティモアのジョンズ・ホプキンス大学で